

築地川の渡し

-掘割遺構の再編空間デザイン提案-

千葉大学大学院 山口綾乃

街中で通過するリニアなワイド空間や道路の不自然な線形勾配。これらの場所の過去を辿ると水辺江戸の掘割や橋の存在に繋がる。高層ビルが並ぶ並行交通インフラが行き交う東京の混沌とした街並みの足元には、16世紀に計画された江戸の都市骨格が根付く。まちの足元と異なるレベルに空間が存在する風景は掘割の遺構である。本研究提案では、掘割遺構を土木・建築・ランドスケープの3観点から再編し、この都市骨格の空間活用可能性を探る。かつて掘割や河川が多く存在した東京都中央区築地界隈を対象エリアとし、掘割、そして人々の結節点となっていた橋を再評価し、多層化した都市の要素をつなぐ新たな「渡し」を設計する。今まで継承されてきた地形と更新されるインフラをこれからも都市基盤として広がり、施設の枠を打ち崩しリアパブリックスペースとしてリデザインする。これにより築地川は再び都市に広がる流れとなり、人々の足元に広がり続ける。

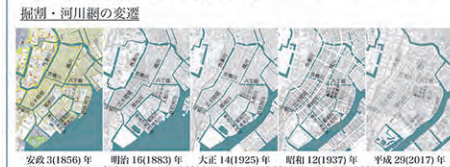
構成 第一部 調査・研究

i. 交通インフラ網の変遷 河川・掘割、道路の変遷を比較

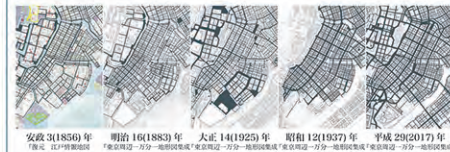


変遷図

江戸、明治、大正、昭和、平成の地図から掘割・河川および道路をトレースし、変遷を扱う。対象：外濠川、楓川、京橋川、八丁堀、三十三間堀、楓川・築地側連絡運河、入船川、鉄砲洲川、築地川、築地川南支川、築地川東支川、汐留川（計12本）



道路網の変遷



結果 i

震災・戦災・社会情勢を背景に昭和期に掘割のほとんどが姿を消す。また、昭和期に道路・高速道路・建築など掘割ごとに用途更新される。

掘割・河川の用途更新

| 掘割・河川名 | 河岸 | 周辺用途 | 現況 | | | | | | | |
|--------------|----------------|------------|----|----|----|-----|---|---|---|-------------|
| | | | 道 | 建物 | 公園 | 駐車場 | 駅 | 橋 | | |
| 1 外濠川 | 京橋側(土手掘削跡) | 屋敷、町人地 | 12 | | | | | | × | 道 |
| 2 汐留川 | 三十三間堀より内(堀外:道) | 町人地、屋敷 | 10 | | | | | | × | 道 |
| 3 京橋川 | 河岸 | 町人地 | 6 | | | | | | × | 建物・高層高速道路 |
| 4 楓川 | 河岸 | 町人地、わずかに屋敷 | 10 | | | | | | × | 首都高環状線 |
| 5 三十三間堀 | 河岸 | 町人地、屋敷 | 9 | | | | | | × | 建物・道 |
| 6 八丁堀 | 河岸 | 町人地 | 5 | | | | | | × | 建物 |
| 7 堀川・築地川連絡運河 | 家 | 屋敷 | 2 | × | × | × | × | × | × | 首都高環状線 |
| 8 築地川 | 家、道 | 屋敷 | 19 | | | | | | × | 首都高環状線・川・公園 |
| 9 築地川南支川 | 寺院、河岸 | 寺院 | 3 | | | | | | × | 公園・駐車場 |
| 10 築地川東支川 | 道 | 屋敷、寺院 | 6 | | | | | | × | 道 |
| 11 入船川 | 河岸か蔵地 | 屋敷 | 5 | × | | | | | × | 建物・道 |
| 12 鉄砲洲川 | 家、道 | 屋敷 | 6 | | | | | | × | 道 |

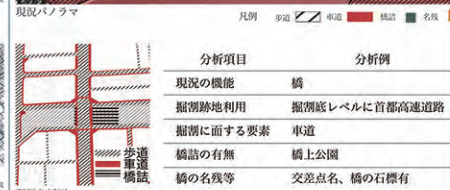
- ・昭和期に掘割のほとんどがなくなる
- ・用途更新後は道路が半数以上

ii. 橋跡空間分析



橋跡空間

分析i同様、江戸、明治、大正、昭和、平成の5か年代の地図から橋の存在年代を調査。その後、橋跡地の現況を橋跡の交通動線、構造、掘割跡の状況等5項目調査し、空間分析を行う。分析対象12本の掘割・河川に架かる94本の橋跡を調査対象とする。



結果 ii

橋跡空間はA橋型、B交差点型、C行き止まり型、D消失型の4つの型に分類することができ、それらは掘割・河川ごとに傾向が見られる。中でも築地川・楓川は地形として掘割の構造が残る。また、地名や石標等による周辺への文化的意味が継承されていることもわかる。

橋の残り型4型



- ・掘割ごとに橋の型に傾向がある
- ・築地川・楓川は地形として窪地が残る

第二部 制作提案

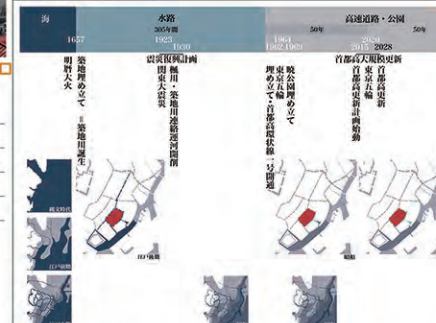
築地川の渡し 築地川跡地の再編計画提案



まとめ

- ・築地川は地形として掘割構造が残る
 - ・交通インフラ用途更新が一様ではない
 - ・橋の残り方が多様
- 窪地の複層を残す、活かす

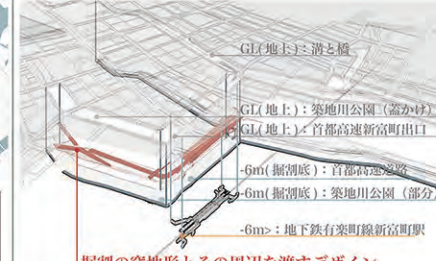
築地川の変遷



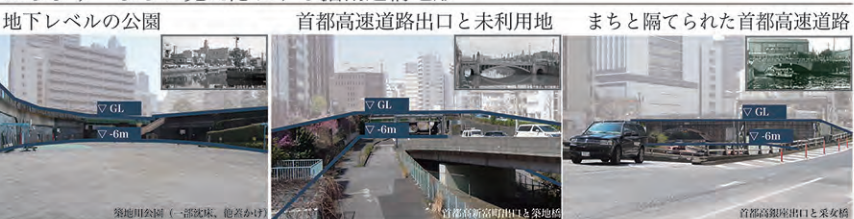
江戸町下町の発展により液となり、明暦の大火のがれきり処理を機に「築地」は埋立地として人々の生活の地となる。同時に築地川が誕生し、その後305年間掘割として存在した。1964年の東京五輪時に築地川は水をなくし、掘割地形をそのまま首都高に用途更新された。現在も築地川の一部は首都高速道路が走るが、コンクリート擁壁の安全性確保のため擁壁の更新計画が進む。

築地川の複層

現況は用途・機能が3層重なる。3層の行き来はそれぞれ専用の通路・道路のみで、その動線用地のために使われない空間が生じている。



はじまり まちに見え隠れる掘割遺構地形



水をもたない線形の窪地形に残る橋



窪地形は江戸以降水都を支えた掘割に重なる



目的

- ・掘割・道路の名残や影響要素・空間的特徴分析
- ・築地川の窪地再編計画提案



3つのインフラに空間の広がり演出する橋渡しをつくる

- ・昭和期に掘割のほとんどがなくなる
- ・用途更新後は道路が半数以上
- ・掘割ごとに橋の型に傾向がある
- ・築地川・楓川は地形として窪地が残る

設計手法 3つの手法を用い空間の広がりを出

i 窪地の構造を更新

窪地構造を特徴付ける間・底・壁の3要素を各場所の更新においてそれぞれフォーカスする。

緑と雨の渡し

光の渡し

風の渡し

間

底

壁

ii 意識を向ける

かつては掘割に向いていた街も、水運の衰退や水環境の悪化から向きが変化した。築地川に人々の意識・動きを向きなおすきっかけをつくる。

緑と雨の渡し

光の渡し

風の渡し

植栽計画

大屋根の設え

壁の更新

iii 垂直方向の関係性を結ぶ・動線

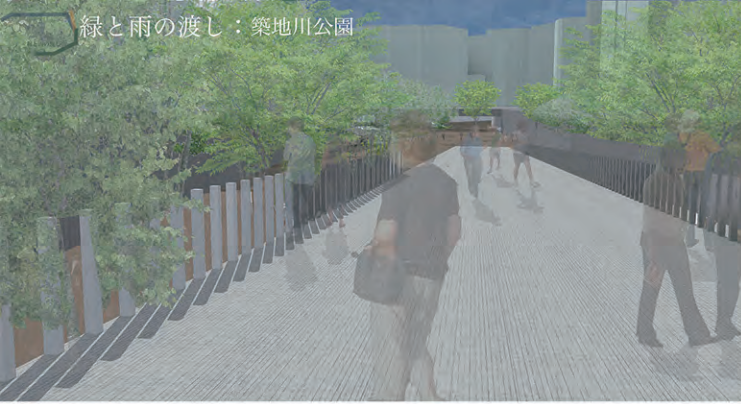
最後に垂直方向の直接的な関係を結ぶために人・車の動線を操作し、人の流れを再編する。

公園内外をつなぐブリッジ

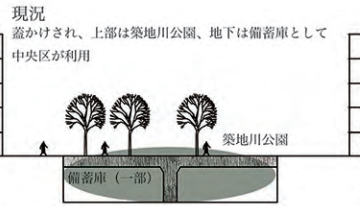
公園・周辺から地下鉄への接続

首都高速道路と出口

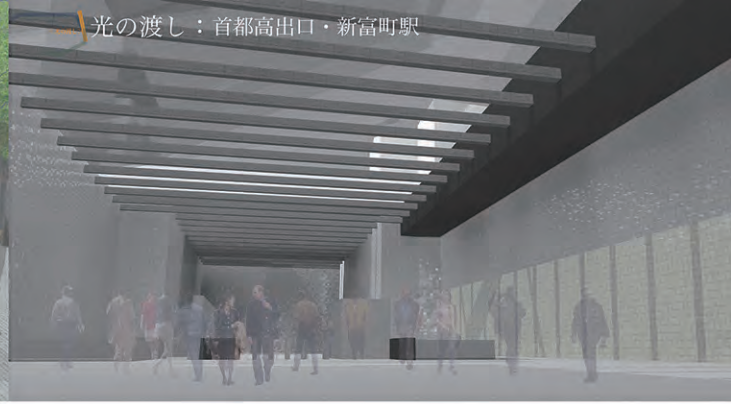
緑と雨の渡し：築地川公園



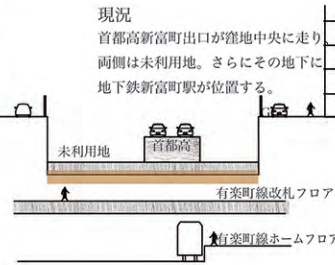
築地川東部。周辺の住人・働く人、大学病院、また小学校と多様な人にとっての憩いの場を創出。空の広がる奥行き長い空間で、窪地ならではの地上の雑多な日常と離れた時間を過ごす。地上と元掘割底の垂直方向、またかつての備前橋から入船橋までの街を貫くブリッジを設えることで、周辺に新たな動線をもたらすとともに、地下空間と地上空間あらゆる地点を訪れる人それぞれの居心地の良い場所を楽しむ。



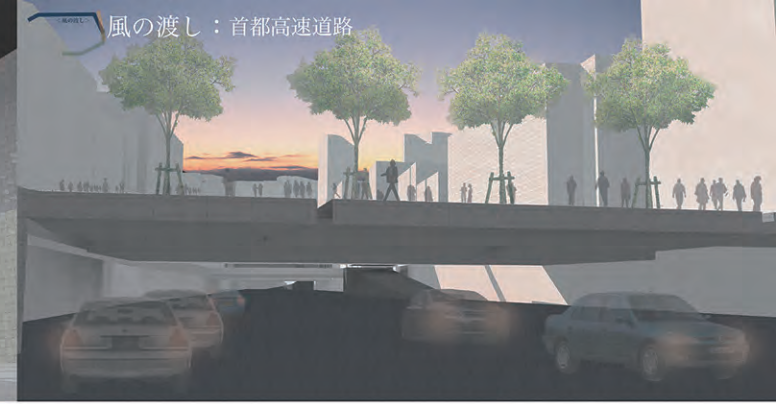
光の渡し：首都高出口・新富町駅



築地川北部。光の渡しは、首都高速道路環状線1号線の新富町出口と地下鉄有楽町線新富町駅が位置する地下交通と地上との結節点である。コンクリート擁壁・底で隔てられていた二つの交通インフラは底をルーバー更新することで、空・光による開放的な駅舎にリデザインする。地下鉄出口のひとつを緑と雨の渡しのブリッジとつなぐことで、地上から掘割底、さらに地下へと降りることで通常の地下鉄駅とは異なる空間体験を得る。



風の渡し：首都高速道路



築地川西部、1964年東京五輪時に掘割から首都高速道路へとインフラ機能が変った。トンネルではなく空が広がり”風”の通り道となる線形空間へと再編。コンクリート寿命から擁壁更新が計画されており、更新と同時に壁を空間を支えるためだけでなく、周囲との環境的・景観の連続性を創出するマルチ機能をもつ壁とすることで、首都高を走るドライバーにとっても、周辺を行き交う人にとっても心地よい道路空間をつくる。

